

PRESS RELEASE (広報用資料)

田沼武能写真展 東京わが残像 1948-1964

Tanuma Takeyoshi : Picturing My Tokyo 1948-1964



① 《路地裏の縁台将棋》[佃島] 1958年/第1章「子どもは時代の鏡」より

2019年2月9日 [土] → 4月14日 [日]

世田谷美術館
SETAGAYA ART MUSEUM

展覧会概要

終戦直後から活躍し、90歳を迎えようとする今も第一線で活動を続ける写真家・田沼武能（1929-）。田沼は1949年に東京写真工業専門学校（現・東京工芸大学）を卒業後、名取洋之助主宰のサン・ニュース・フォトス社に入り、木村伊兵衛の助手として写真修業をスタートしました。『藝術新潮』の嘱託写真家として昭和を代表する文化人の肖像写真連載で注目を集めたのち、アメリカのタイム・ライフ社と契約、世界中を取材撮影しフォト・ジャーナリズムの分野でも頭角を現します。また、1984年からは黒柳徹子ユニセフ親善大使の援助国訪問に毎回同行するほか、これまで120カ国以上で子どもの写真を撮り続けるなど幅広い分野で活躍する一方、日本写真家協会会長を務め写真文化の発展に尽力されてきました。

そんな田沼が文化人肖像や世界の子どもとともにライフワークとしてきたのが、下町を中心とした「戦後東京」の写真です。浅草の写真館に生まれた田沼は、東京大空襲で生家を焼き出され逃げ惑う体験をしました。その時の鮮烈な記憶が自身の写真家としての原点になっているといます。本展では、終戦直後の焼け野原から出発し、さまざまな矛盾を内包しながらも再生を目指し激しく変貌した東京の、1964年オリンピックに至るまでの諸相をとらえた写真180点を「子ども」「下町」「街の変貌」の3つの視点から紹介します。また、特別企画として田沼撮影による世田谷ゆかりの文化人の肖像写真24点を併せて展示、総計204点の写真作品で「戦後東京」の姿を振り返ります。

展覧会のみどころ

Point 1 田沼武能の生誕90年、写真家生活70年の節目に開催される展覧会です。

田沼は1929年に生まれ、1949年に写真学校を卒業しプロとして活動を始めました。そして本展会期中の2月18日には90歳の誕生日を迎えられます。戦後の日本写真界をリードし続け、今も第一線で活躍する田沼武能の最初期の活動を紹介する貴重な展覧会です。

Point 2 田沼武能による「戦後東京」をテーマにした初の大規模個展です。

「世界の子ども」や「文化人の肖像」をテーマにした個展はこれまでも開催されていますが「戦後東京」をテーマにした展覧会は、写真ギャラリーで数十点規模のものが開催されたのみで180点もの作品が揃う展覧会は今回が初めてです。元号の変更と2度目のオリンピックを控え「戦後」がさら遠くなりつつある今、田沼の作品は私たちの眼にどう映るのでしょうか。

Point 3 「世田谷の文化人」肖像写真を併せて展示します。

田沼は「文化人の肖像写真」で初の雑誌連載と個展の機会を得たほど、活動初期からの代表的な仕事のひとつです。本展では世田谷美術館での開催にちなみ、膨大な作品のなかから田沼自身が選んだ世田谷ゆかりの芸術家や小説家ら文化人の肖像写真24点を展示します。

Point 4 写真作品のほかにも、さまざまな戦後資料を一堂に展示します。

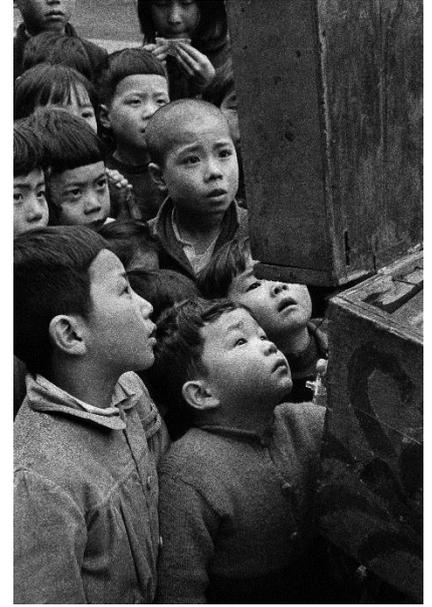
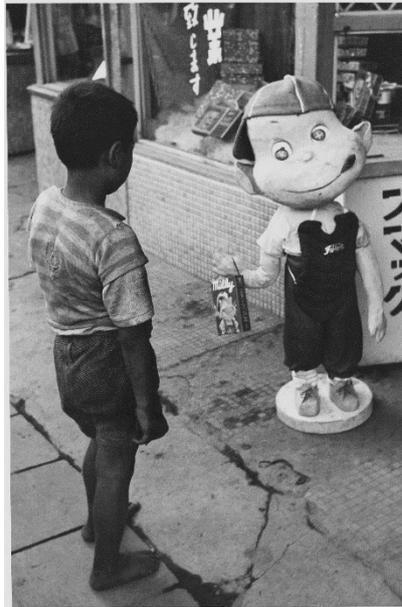
写真を鑑賞しながら戦後資料を見ることで、より時代の雰囲気を感じられるようにしました。おもちゃや漫画、車や家電のチラシ、地図や路線図、東京タワーやオリンピックの入場券やリーフレットなどは、当時を知る方には懐かしく、若い方の眼には新鮮に映ることでしょう。

第1章 子どもは時代の鏡

終戦直後、街には行き場を失った戦災孤児があふれ、戦争が終わっても簡単に平和が訪れないことを痛感させられます。その一方で、貧しい暮らしのなかでも、子どもたちは笑い泣き、食べて遊びケンカをする…その姿はこの国の未来への希望の象徴でもありました。田沼はそんな子どもたちに真摯に向き合い、優しい眼差しでシャッターを切っています。

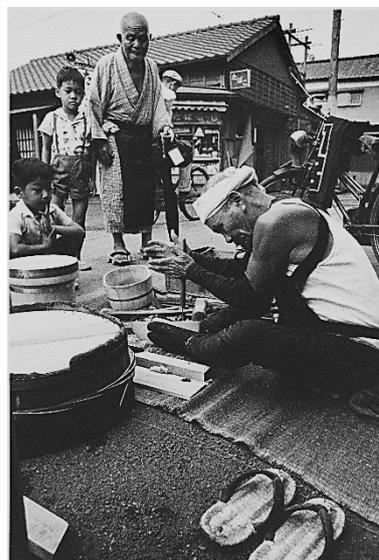
左：② 《ペコちゃん人形の持つミルクが欲しい戦災孤児》
[銀座] 1950年

右：③ 《紙芝居に夢中の子どもたち》[佃島] 1955年



第2章 下町百景

仕事ではない写真を撮ろうと思った時、田沼の足は自然と自身の生まれ育った下町に向かいました。戦争を機にいろいろなものが変わりましたが、下町には江戸時代から連綿と続く情緒と人情がありました。家と外との境がなく一体になったような下町の長屋では、人々がいきいきと暮らしています。田沼の眼は人々の日常の暮らしのなかの「変わりゆくもの」と「変わらないもの」、その両方を見つめています。



上：④ 《三社祭りを見に来たいきな娘と現代娘とアメリカ青年》[浅草] 1955年

下左：⑤ 《年に一二回来た桶直しの巡回職人》
[荒川区尾久] 1962年

下右：⑥ 《国際劇場の屋上で憩う踊り子》[浅草] 1949年

第3章 忘れ得ぬ街の貌かお

上左：⑦《駒沢陸上競技場の建設工事》[世田谷区] 1963年

上右：⑧《ウインドウ・ショッピング》[銀座] 1953年

戦後混乱期を脱すると、街はオリンピックに向けて急速な変貌を遂げてゆきます。いたるところで古いものは破壊され、埋め立てられ、新しい建造物が次々とできました。発展には歪みも伴い、ゴミや悪臭などの社会問題も生じました。

田沼の写真からは、矛盾を抱えつつも変わり続ける東京の強烈なエネルギーとともに、失われゆく「ふるさと」に対する愛惜の思いをも感じられます。



下左：⑨《日本橋の上をまたぐ首都高速道路を建設中》[中央区] 1963年

下中：⑩《若いカップルとマイカー時代のはしり》[深川] 1962年

下右：⑪《オリンピック開幕で市街を走る聖火ランナー》[東京] 1964年

特別展示 世田谷の文化人

雑誌の企画であった文化人たちの肖像写真は、20代前半であった田沼の出世作となりました。

自分の親よりも年長の、その道の大家・巨匠たちを相手に田沼は物怖じすることなく懐に入り、撮られた大物たちも子どものような年齢の田沼に心を許し、構えることなく自然な表情を見せています。その後も田沼はライフワークとして、数多くの文化人の肖像を撮り続けています。

本展では当館での開催にちなみ、宮本三郎や柳原義達、遠藤周作をはじめ世田谷区にゆかりのある芸術家や小説家ら文化人の肖像を展示します。世田谷区には昭和初期より数多くの文化人たちが居を構え、田沼も撮影のため足繁く通ったといいます。彼らはまさに「戦後東京」を代表する顔なのです。

- 1929年 写真館を経営する家庭の第4子として東京・浅草に生まれる
- 1945年 東京大空襲で家や写真館機材の一切を焼失。長野県南佐久郡に疎開、終戦を迎える。
- 1946年 一家で浅草に戻る。東京写真工業専門学校（現・東京工芸大学）に入学。
- 1949年 東京写真工業専門学校を卒業。サン・ニュース・フォトスに入社し、木村伊兵衛に師事。
- 1950年 生活費を切り詰め貯金をし、念願のライカIII Cを購入。
- 1951年 新潮社の嘱託として『藝術新潮』や『新潮』の撮影を担当。
- 1956年 エドワード・スタイケン企画「ザ・ファミリー・オブ・マン」展の日本巡回に作品が出品される。
- 1959年 サン通信社および新潮社嘱託を退き、フリーランスとなる。
- 1965年 アメリカのタイム・ライフ社の契約写真家となり『LIFE』『FORTUNE』誌の取材撮影を行う。フランスのブローニュの森で子どもを撮ったのをきっかけに世界の子どもの撮影を始める。
- 1975年 第25回日本写真協会年度賞を受賞。
- 1979年 第14回モービル児童文化賞を受賞。
- 1984年 黒柳徹子ユニセフ親善大使の初親善訪問に同行し、タンザニアで撮影。以降同大使の全ての援助国訪問に同行。
- 1985年 第33回菊池寛賞を受賞
- 1988年 第38回日本写真協会年度賞を受賞。
- 1990年 紫綬褒章を受章。
- 1994年 第44回日本写真協会年度賞を受賞
- 1995年 日本写真家協会会長に就任。
東京工芸大学芸術学部写真学科教授に就任。
- 2000年 日本写真著作権協会会長に就任。
- 2002年 勲三等瑞宝章を受章。
- 2003年 文化功労者に顕彰される。
- 2006年 日本写真保存センター設立推進連盟の発足にあたり副代表に就任。
- 2014年 第63回日本写真協会功労賞を受賞。



⑫ 田沼武能近影 撮影：東松友一

◇主な写真集

- 『武蔵野』 朝日新聞社 1974年
- 『世界の子供たちはいま』 形象社 1978年
- 『東京の中の江戸』 小学館 1983
- 『アンデス賛歌』 岩波書店 1984年
- 『アトリエの101人』 新潮社 1990年
- 『戦後の子供たち』 新潮社 1995年
- 『人間万歳』 クレオ 2000年
- 『60億の肖像』 日本カメラ社 2004年
- 『時代を刻んだ貌』 クレヴィス 2014年

◇主な個展

- 「ブンガワン・ソロのなやみ」
ニコンサロン 1968年
- 「世界の子供たちはいま」
日本橋高島屋ほか全国各地巡回 1979年
- 「カタルニア・ロマネスク」
レリダ市ほかスペイン各地巡回 1988年
- 「地球星の子どもたち」
Bunkamura ザ・ミュージアム 1994年
- 「60億の肖像」 東京都写真美術館 2004年
- 「時代を刻んだ貌」 練馬区立美術館 2017年

関連企画

◆田沼武能×大村彦次郎（編集者・文芸評論家）クロストーク

写真家と編集者として長年親交のある東京下町生まれのお二人に、子どもの頃のことや東京の街、さらにはこれまでのお仕事についてなど幅広く語っていただきます。

日時：2月23日 [土] 午後2時～3時30分（開場午後1時30分） 場所：当館講堂

定員：140名 手話通訳付き ※申込不要、参加無料。当日午後1時より整理券配布

◆田沼武能講演会「わが写真家人生」

本展会期中に90歳の誕生日を迎える田沼氏。本展出品作の解説や新人の頃のエピソードから、海外での取材活動や近年のライフワークまで、70年にわたるご自身の写真家人生についてお話しいたします。

日時：3月16日 [土] 午後2時～3時30分（開場午後1時30分） 場所：当館講堂

定員：140名 手話通訳付き ※申込不要、参加無料。当日午後1時より整理券配布

◆100円ワークショップ

子どもから大人まで、どなたでもその場で気軽に参加できる工作です。

日時：会期中の毎週土曜日午後1時～3時（随時受付） 場所：地下創作室 参加費：100円

開催概要

会期：2019年2月9日 [土] → 4月14日 [日]

会場：世田谷美術館 1階展示室

休館日：月曜日（ただし2月11日 [月・祝] 開館、2月12日 [火] は休館）

開館時間：午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）

観覧料：一般：1,000(800)円、65歳以上：800(600)円、大高生：800(600)円、中小生：500(300)円

※（ ）内は20名以上の団体料金。

※ 障害者は500円、大高中小生の障害者は無料。介助者（障害者1名につき1名）は無料。

※ リピーター割引：会期中本展有料チケットの半券をご提示いただくと、2回目以降は団体料金にてご覧いただけます。

主催：世田谷美術館（公益財団法人せたがや文化財団）

後援：世田谷区、世田谷区教育委員会、公益社団法人日本写真家協会、公益社団法人日本写真協会

協賛：東京工芸大学、株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン

助成：公益財団法人朝日新聞文化財団

企画協力：株式会社クレヴィス

交通案内

- ・東急田園都市線「用賀」駅下車、北口から徒歩17分
もしくは美術館行バス「美術館」下車徒歩3分
- ・小田急線「成城学園前」駅下車、
南口から渋谷駅行バス「砧町」下車徒歩10分
- ・小田急線「千歳船橋」駅から
田園調布行バス「砧町」下車徒歩5分
- ・来館者専用駐車場（60台、無料）：東名高速道路降下
厚木方面側道400m先。美術館まで徒歩5分

同時開催：ミュージアム コレクションⅢ

アフリカ現代美術コレクションのすべて
開催中～2019年4月7日（日）

◆お問い合わせ

世田谷美術館

〒153-0075 東京都世田谷区砧公園 1-2

Tel：03-3465-6011（代表）

※午前10時～午後6時 月曜休館
（月曜祝日の場合は翌平日が休館）

Fax：03-3415-6413

◎展覧会のご案内

Tel：03-5777-8600（ハローダイヤル）